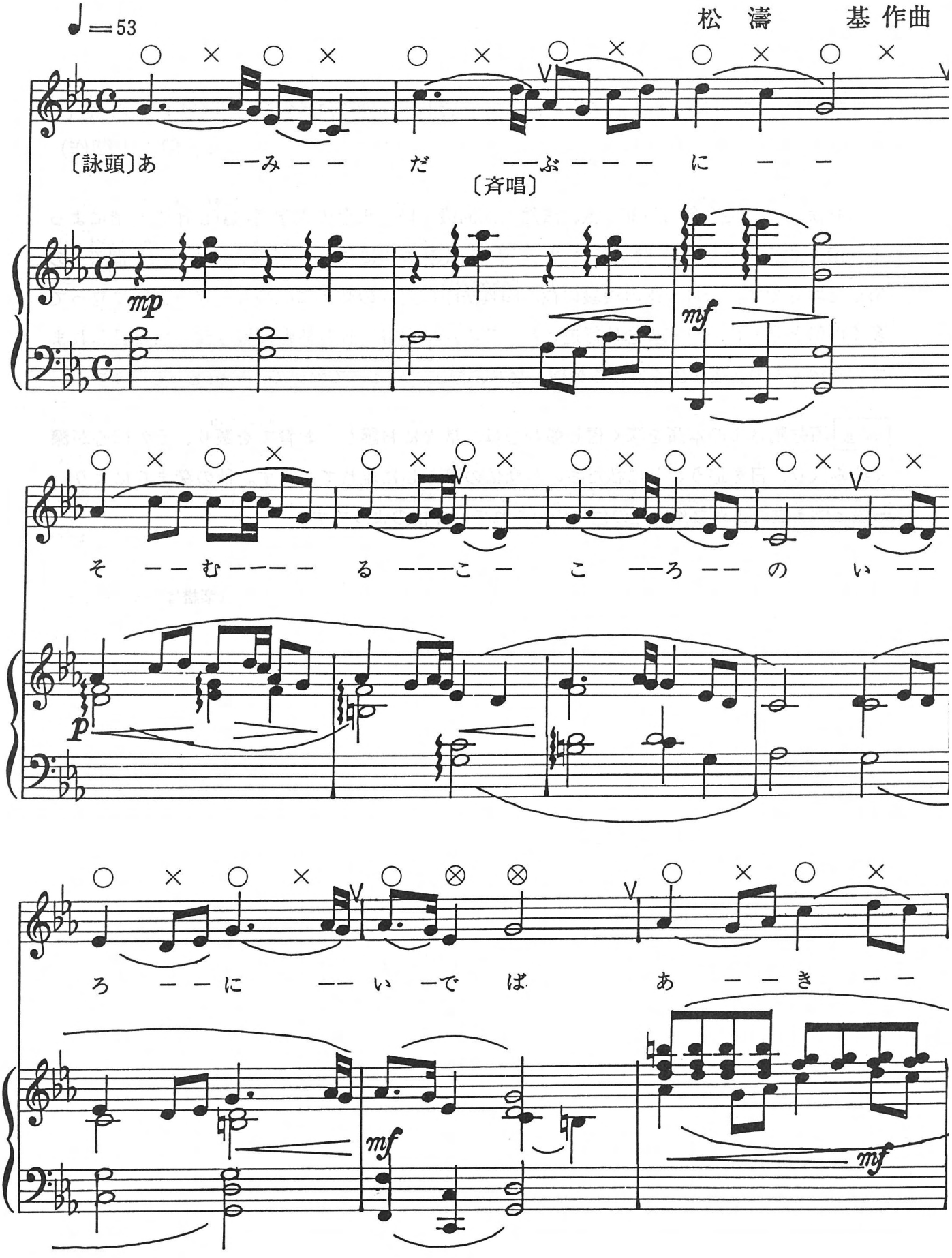
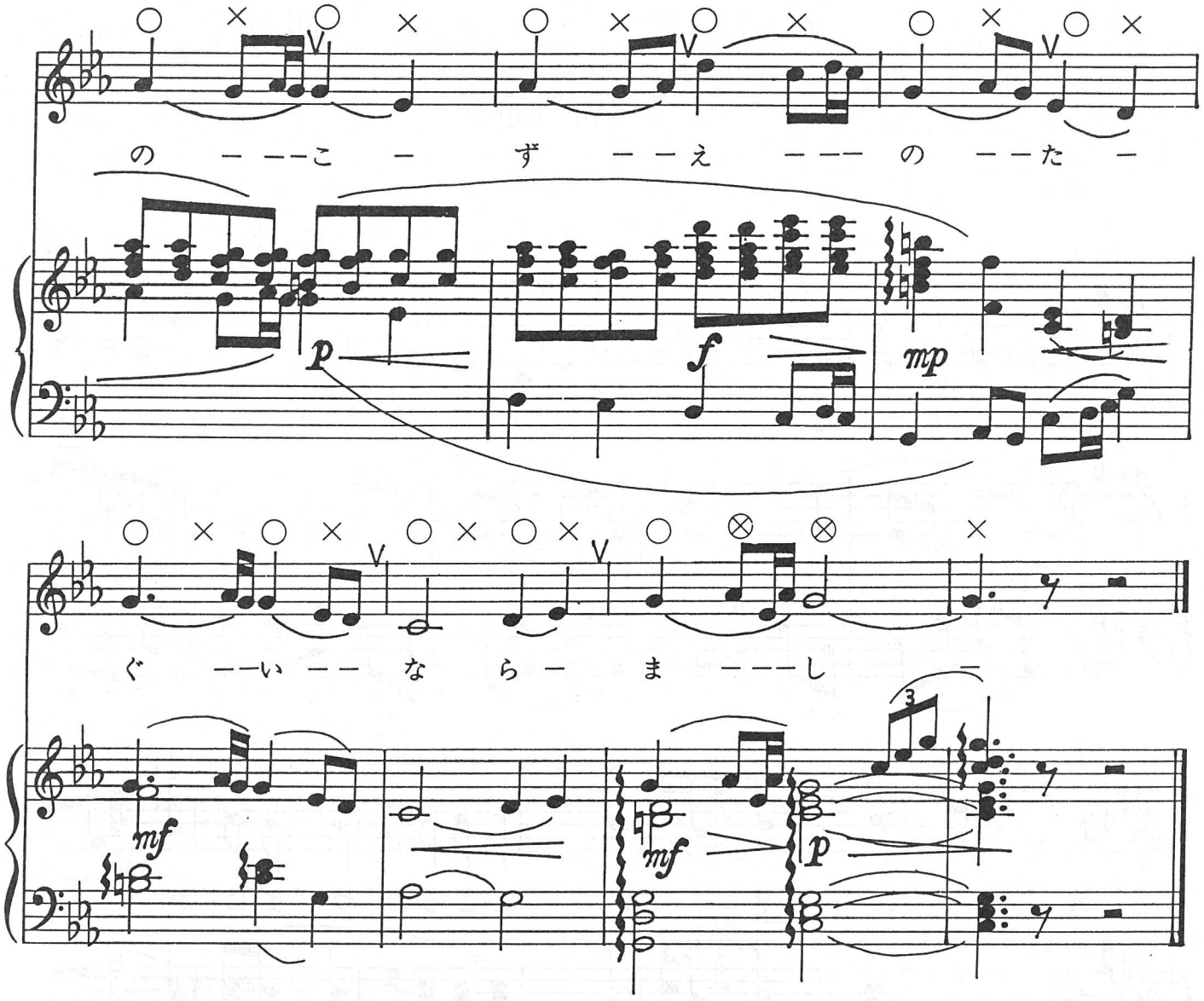
第二十一番　勝林院の御詠歌（明照調）

（秋の御詠歌）

（歌詞は５３ページ）

ポイント注意　●息つぎに特に注意します。

第二十一番　山城の国 大原　勝林院

阿弥陀仏に　染むる心の　色に出でば　秋の梢の　たぐいならまし
（法然上人御作）

勝林院は、文治２年（1186）秋、法然上人54歳の時、天台の大学者顕真法印（けんしんほういん）の要請によって、南都北嶺の多数の名僧学匠に対し、お念仏の法門について談義された「大原問答（おおはらもんどう）」のあったお寺です。一日一夜の談義の後、顕真法印（けんしんほういん）は上人の教えに感嘆し、自ら先頭に立って多くの僧とともに三日三夜念仏行道され、その声は山谷に満ち林野に響き渡ったと言われます。法然上人の教えが広く伝わる契機となり、浄土宗にとって因縁の深い聖地であります。

大意　阿弥陀さまの本願を深く信じ頼む心は、常々にお護り・お育てを蒙（こうむ）り、その御心が深く染み入り、日を追うごとに私たちのお念仏の暮らしに現れてきます。秋の深まりにより、一段と燃え立つような深い紅の色に染められていく梢のようです。

（楽譜は５４ページ）